

伝吉村迂齋序を付したのは誰か

—志筑忠雄「曆象新書」受容史の一駒—

大島 明秀

はじめに

志筑忠雄の代表作とされる「曆象新書」(一八〇二成)については、とりわけ吉田忠によって、「曆象新書」完成に至る志筑の執筆過程や蘭書原典との対応関係、内容の科学的的位置づけ、さらには近世大坂で思々齋塾を営んでいた中天游の受容まで論じられてきた¹⁾。

そこで本稿では趣向を変えて、「曆象新書」の内容ではなく、伝播した写本自体を対象とし、いくつかの本に付された伝吉村迂齋序に着目し、その作者誤伝の可能性について検討を試みるものである。

一、「曆象新書」に付された伝吉村迂齋序

寛延二年(一七四九)、長州(萩)藩長崎藩邸御用達吉村利兵衛永清の長男として迂齋は生まれた。名は正隆、通称久右衛門、字士興、初め紫溟と号し、後迂齋と改め、烟霞外史とも号した。一七歳で家督を継いだ迂齋は、その前年かこの頃松村元綱とともに、芙蓉詩社を興し長崎詩壇の中心にあつた高階陽谷に師事し、

また、妻の叔父で長崎聖堂助教をつとめた高松南陵に古文辞を学んだ。迂齋は詩をよくし、詩結社同声社を結び、門人を擁したことも知られる。文化二年(二八〇五)病没、春徳寺に葬られた²⁾。

さて、最初に「曆象新書」に付された迂齋序の存在を指摘したのは古賀十二郎で、その著『長崎洋学史』の中で「東京吉村氏蔵³⁾」写本を用いて釈文を示している。ついで、後年刊行された『吉村迂齋詩文集』(以下、『詩文集』)では、迂齋自筆稿本から序文が掲載された。

以下に両者を引用し、傍線で異同を示した。なお、傍点は底本のまま記したが、読者の見やすさを考慮して、旧字は現在通用する字体に改め、読点の位置は『詩文集』に従った⁴⁾。また、同書において、推測で翻字をした箇所については「？」とし、イエズス会士の名に付された欧文は省き読点とした。なお、書式については『長崎洋学史』に合わせて平出箇所を揃え、これを示した⁵⁾。

【資料一 東京吉村氏蔵「曆象新書」序(『長崎洋学史』上巻、三四八〜三四九頁)】

曆象新書序

古者授人時、布教、皆莫不本諸仰觀資諸俯察、故在上建其制、在下從其政、皆不可不明此也、士不通三才、

成焉

【資料一 迂齋自筆稿「曆象新書」序（吉村迂齋詩文集）一二〇～一二二頁】

曆象新書序

古者授人時、布政教、皆莫不本諸仰觀資諸俯察、故在上建其制、在下從其政、皆不可不明此也、士不通三才、不足以為士、宜哉觀象察理之學、如此其難矣、而察理之用、莫廣於充觀象之用也、則觀象之學且大、密且緻、其難也可知矣、有經有緯層層羅列、有順有逆運轉各異、不可梯而升也、不可摸而索也、眩矣邈矣、蓋所究極其然、故非研精覃思、尽心力知□、則未能得極精緻也、近西欽若曆象之術廢、義和之涵淫、周室之衰、其道愈荒以至元明、雖有彼善於此、於其間皆未得其粹者也、爰暨萬曆之時、受遠西士之傳而來、其術始詳焉、蓋遠西之士航海之所至、幾悉地之全球、以觀察其異同、而后發其妙思、製其奇器、曆象之術及於千古之所未及能及者也、然而近西之所受、猶未及此篇之所謂太陽為衆天之心、不運有轉地以為各曜之伍有運而且轉等、確奇之說也、彼遠西士、利瑪竇、熊三拔、懷仁之輩、以未達此而不傳之歟、抑雖傳之、而以有違其古聖人建言之旨不受以述之歟、

皇朝曆象家專□近西之法、如今此篇之所述果有精確

不足以為士、宜哉觀象察理之學、如此其急矣、而察理之用、莫廣於充觀象之用也、則觀象之學且大、密且緻、其難也可知矣、有經有緯層層羅列、有順有逆運轉各異、不可梯而升也、不可摸而索也、眩矣邈矣、莫所究極其然、故非研精覃思、尽心力知得、則未能得其精緻也、近西欽若曆象之術廢、義和之涵淫、周室之衰、其道愈荒以至元明、雖有彼善於此、於其間皆未得其粹者也、爰暨萬曆之時、受遠西士之傳而來、其術始詳焉、蓋遠西之士航海之所至、幾悉地之全球、以觀察其異同、而后發其妙思、製其奇器、曆象之術及於千古之所未及能及者也、然而近西之所受、猶未及此篇之所謂太陽為衆天之心、不運有轉地以為各曜之伍有運而且轉等、確奇之說也、彼遠西士、利瑪竇、熊三拔、懷仁之輩、以未達此而不傳之歟、抑雖傳之、而以有違其古聖人建言之旨不受以述之歟、

皇朝曆象家專發于近西之法、如今此篇之所述、果有精確可取裨益授時也、既資于近、何厭取遠、我又何拘彼坤地方靜之說哉、況以太陽為心、有闕涉乎開闢古傳之旨也、余別有論焉、幸有識之士留心焉、此篇即翻遠西書者、故諷士中野生之所述也、生有奇才、且多所涉獵、最精遠西書、此篇才其一班爾、嘗罹奇疾、解職養間數年、沈痾悉愈、今猶強壯、惜無祿乏其器籍、罷職少其新聞、雖然又以其間能有此篇、吾復將責其

可取裨益授時也、既資于近、何厭取遠、我又何拘彼坤地方靜之說哉、況以太陽為心那開涉於開闢古傳之旨也、余別有論焉、幸有識之士留心焉、此篇即翻遠西書者、故訊士中野生之所述也、生有奇才、且多所涉獵、最精遠西書、此篇才其一班爾、嘗罹奇疾、解職養間數年、沈痾悉愈、今猶強壯、惜無祿乏其器籍、罷職少其新聞、雖然又以其間能有此篇、吾復將責其成焉

古賀十二郎が用いた「東京吉村氏蔵」の写本が、『詩文集』で底本とされた迂齋自筆稿と同一本と考えるのがごく自然であるが、両者を比較したところ、釈文が所々で異なっており、ひとまず同一本と見做すことはできない。異同の中には文章自体が異なっている箇所もあるが、大半は古賀の翻刻誤りか、もしくは底本とした両写本における用字や文章脱落、あるいは資料の破損等に起因する問題と考えられるため、内容としては同じものであると言つてよい。なお、底本とされた両本は、現在の所蔵場所が確認されていないため、現物資料で突きあわせることができない状況である。

二、芳沢藤原武卿の署名

前に見た二つの序に迂齋の名が見えないことに留意

しつつ、日本数学史家三上義夫による論文「塵跡線若くは塵跡弧に就いて」に着目したい。その中で三上は「曆象新書」を用いており、そこに「南部の処士芳沢武郷」の序があることを述べ、全文ではなく、志筑忠雄にまつわる「生有奇才、且多所涉獵、以原職、故最精遠西書、此篇才其一班爾、嘗罹奇疾解職、養間數年、沈痾悉愈、今猶強壯、惜無祿乏其器籍、罷職少其新聞、雖然又以其間、能有此篇吾復將責其成焉」という部分だけ抜き出して紹介している。破線部については前述の二つの序に見られない記述であるが、その他の文章は一致しており、つまり、「南部の処士芳沢武郷」の序は、伝吉村迂齋序と同一である可能性が浮上する。

この序を有する資料を搜索した結果、九州大学が所蔵する五冊本に行き着いた。書冊の中には二四・八×三三・三糶の一紙が挟み込まれており、そこには墨書で次のように記されており、近代に作成された謄写本であることが分かる。

記／一金五拾円也／曆象新書五冊枚数式百八拾七枚
／謄写料／右正々領収候也／東京市芝区三田南寺町
／十番地／大正十年五月廿八日 田中保之（「田中」
朱印）

本資料の上編には伝吉村迂齋序が認められるものの、やはり迂齋の署名は見当たらず、三上義夫が「吉沢武郷」と呼ぶ人物の年記のみ確認できることは注意すべきである。それでは序の全文を見てみよう。なお、読点は写本に朱で付された位置に従い、先に掲げた二つの序文のいずれとも異なる箇所は二重傍線で、また、前二者のいずれか片方と相違する箇所については傍線で示した。

【資料三 九大蔵近代五冊本「曆象新書」序】

曆象新書序

古者敬授人時、以布政教、莫不本諸仰觀、資諸俯察、故在上之建其制、在下之從其政、皆不可不明於此也、士不通三才、不足以為士、宜哉觀象察理之學、如是其急矣、而察理之用、莫広於充於觀象之用也、則觀象之學、広遠密緻、其難也可知、絳緯順逆、左右旋駟、層々各異、不可櫛升也、不可摸而索也、眩矣、邈矣、莫所究極、其然、故非研精覃思、尽心力知巧、則未能得其精緻也、近西欽若歷象之術、靡義和之涵淫、周室之衰、其道愈荒、以至元明、雖有彼善於此於其間皆未得其粹者也、爰暨万曆之時、受遠西士之傳、而來其術始詳焉、蓋遠西之人、航海之所至、幾悉地之全球、以觀察其異同、而后製未曾有之奇器、以歷

象之、故其術及於千古之所未能及者也、然而近西之所受、猶未及此編之所太陽為衆天之心、不運而有轉、地球為各曜之伍、有運而且轉等、確奇之說也、彼遠西士利瑪竇熊三拔南懷仁之輩、以猶未達此而不傳之歟、抑雖傳之、而以有違其古聖人建言之旨、不受以述之歟、

皇朝曆家專資于近西之法、如今此篇之所述、果精確可取、裨益于授時、既資于近、何厭取遠、我又何必拘彼坤地方靜之說哉、況以太陽為心、有闕涉乎開闢古傳之旨也、余別有論焉、幸有識之士留心焉、此篇即翻遠西書者、故象胥季飛志筰氏之所述也、生有奇才、且多所涉獵、以原職、故最精遠西書、此篇才其一班爾、嘗罹奇疾解職、養間數年、沈痾悉愈、今猶強壯、惜無祿乏其器籍、罷職少其新聞、雖然又以其間、能有此篇、吾復將責其成焉、
寛政十二歲次己未春二月南部処士芳沢藤原武郷書於
崎陽客舎

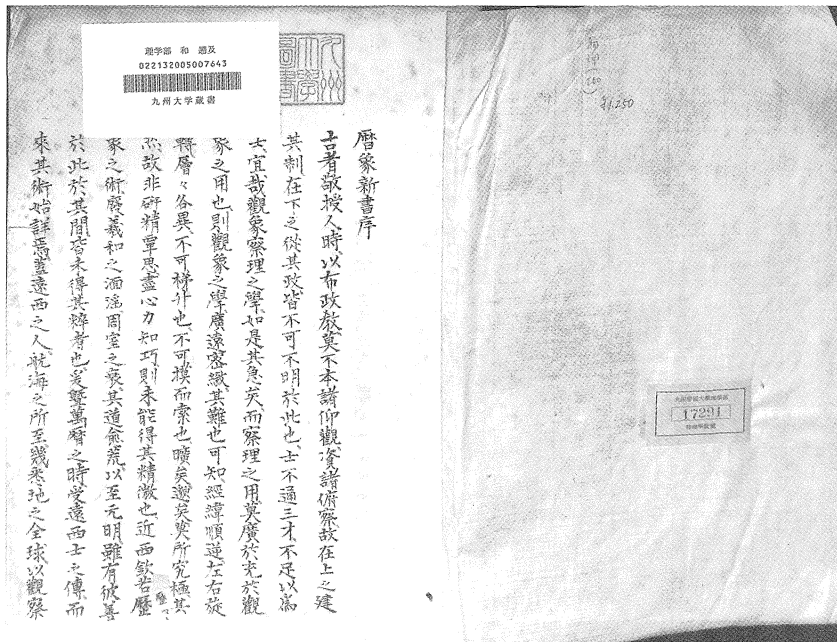


図1-1 下田三蔵（芳沢藤原武郷）署名の「曆象新書」序
（九州大学附属図書館蔵）

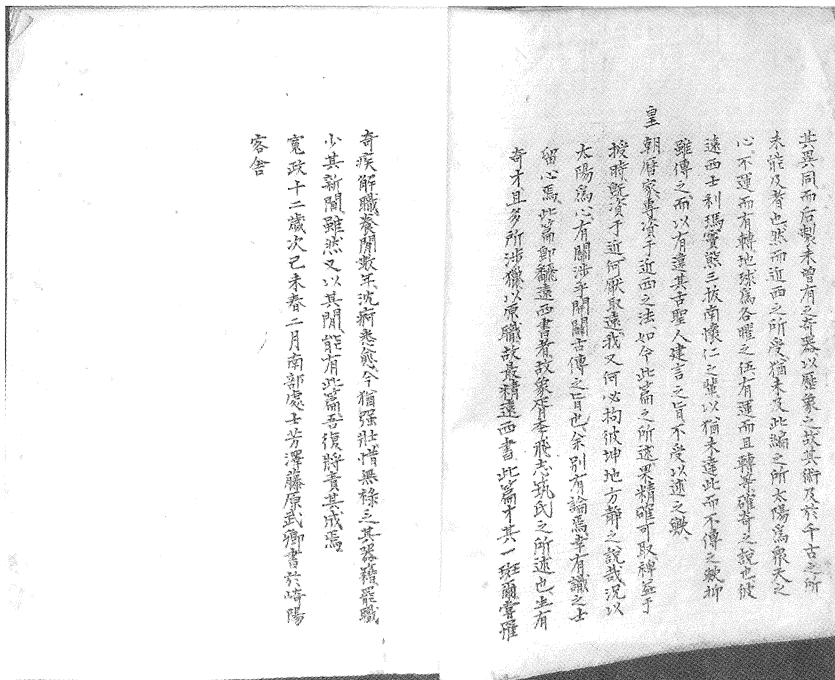


図1-2 序の年記部分

この九大蔵近代五冊本が、三上義夫の用いた底本かどうかは定かではないが、少なくともそれと同一の内容を備えていると見られる。また、前述の二つの伝吉村迂斎序と比較すると、所々文章の異同は確認できるが、明らかに同じ内容を備えたものと言える。

三上が「南部の処士芳沢武郷」と述べた人物は、正確には「南部処士芳沢藤原武郷」と記されている。この記載を手掛かりに人物を追究したところ、南部藩関連の人名録ともいえるべき「南部盛岡藩文芸人名録(稿)」に、「下田三蔵 漢学者。武郷・一甫・芳沢。藩儒。文政三年四月二十四日没。七十一歳。恩流寺。」と見え、この人物が盛岡藩儒下田三蔵であることが判明した。

下田三蔵は、南部家の家臣下田弥左衛門の弟で、天明年間に江戸に遊学し、折衷派の儒者・井上金峨(一七三二〜八四)に学んだ。金峨門下の高弟に進み、その学識が認められて南部藩の江戸屋敷に出入りし、経書講釈をつとめていた。南部藩主利敬は、国許盛岡における学問信仰を図り、文化二年(一八〇五)四月、三蔵に帰国を命じ、十月には「儒学教授」に登用、五十石で召し抱えた¹⁰⁾。

さて、三蔵による序の年記には「寛政十二歳次己未春二月南部処士芳沢藤原武郷書於崎陽客舎」とあり、ここから三蔵が寛政十二歳(一八〇〇)二月に長崎遊

学したことと、長崎の客舎において「曆象新書」上編を写し、序を付したことが分かる。なお、中編が成立したのは寛政庚申(一八〇〇)一〇月であるから、筆写したのは上編のみである。

さらに注目すべきは、志筑忠雄に対する呼称である。三蔵序で「象胥季飛志筑氏」と、「志筑姓」を用いて表現されている一方、その他二つの序文では「訳士中野生」と「中野姓」をもって記されている。志筑が享和三年(一八〇三)一〇月頃から中野姓を名乗り出したことを踏まえる¹¹⁾、三蔵序はその他二つの序より早く成立したと言え、ここにおいて、伝吉村迂斎序の作者は迂斎ではなく、下田三蔵であると結論付けることができるのである。

それではなぜ三蔵序が迂斎序として誤解されてきたのか。

前提として、古賀が用いた底本にも『詩文集』の底本にも下田三蔵序の年記が欠落していたことが背景にあるが、とりわけ、長崎学の泰斗古賀十二郎の影響が大きいと考えられる。

古賀は、前掲三上義夫論文に「吉沢武郷の序があることを紹介し、序の志筑にまつわる部分を自身の底本と比較してはいるものの、底本に付されている序について「吉村迂斎の撰した序文がある。吉村氏自筆の

者である¹²」とし、最終的には序文作者の検討無しに「吉村迂齋が志筑忠雄の爲めに作った序¹³」であると述べている。迂齋自筆本に付された序を無条件に迂齋作と見做したこの発言が誤伝の発端となり、また、その影響力の大きさから古賀の誤った見解が広まり、定着したものと考えられる。

加えて、後年迂齋に関する最大かつ唯一の資料集である『詩文集』に「曆象新書」序が迂齋作品として掲載されたことも、誤伝の普及に拍車をかけることになったものと思われる。

おわりに

以上、これまで吉村迂齋作と伝えられてきた「曆象新書」序について、作者誤伝の可能性を指摘した上で、真の作者が南部藩儒下田三蔵であることを論じてきた。この説明によつて、吉村迂齋と志筑忠雄とが密接な関係にあったことを裏付ける最有力の証拠を否定することになったものの、一方で、「曆象新書」は上編しか成立していない時期に、早くも江戸に伝播していた興味深い事実が判明した。

ただし、まだいくつかの課題が残っている。

第一に、下田三蔵序の原型と変容過程を究明するために、古賀十二郎と『詩文集』が底本とした両「曆象

新書」の発見と、付下田三蔵序が付された系統写本のさらなる発掘が必要である。

第二に求められるのは、九大蔵近代五冊本の中編と下編の位置づけである。

志筑忠雄「曆象新書」の成立時期は、上編が寛政十年（一七九八）六月、中編は寛政庚申（一八〇〇）一〇月、下編が享和二年（一八〇二）一〇月である。繰り返しになるが、三蔵は寛政十二歳（一八〇〇）二月に長崎で上編を書写し、序を付した。そしてこの時「曆象新書」の中編と下編はまだ完成していなかった。

となると、九大蔵近代五冊本の中編と下編は、三蔵が江戸に帰った後に筆写したものに遡るものなのか、それとも三蔵筆「曆象新書」は上編しか存在せず、後世の転写者或いは書肆が他本の中編と下編をこれに入れて五冊本としたのか。写本をめぐる謎は深まるばかりである。

1 吉田忠『「曆象新書」の研究』（『日本文化研究所研究報告』第二五号、一九八九年）など。

2 吉村榮吉編著『吉村迂齋詩文集』（マリノフーズ株式会社史刊行会、一九七二年）、上野日出刀「吉村迂齋について」（『活水論文集 日本文学科

- 編』第三一号、一九八八年)など。
- 3 古賀十二郎著、長崎学会編『長崎洋学史』上巻(長崎文献社、一九六六年)、三四八頁。
- 4 『吉村迂齋詩文集』は翻刻の方針を示していないため真相は分からないが、読点が自筆稿に示された通りに付されている可能性がある。なお、読点は「、」で示した。以下、全ての引用で同。
- 5 『長崎洋学史』および後述九大蔵五冊本で平出が示されている箇所は、『吉村迂齋詩文集』においては単に改段落となっている。これは、翻刻者が平出を理解していなかったことに起因する表現とも考えられるため、ここを平出とした。旧字は現在通用する字体に改めた。以下、全ての引用文で同。
- 6 三上義夫「塵跡線若くは塵跡弧に就いて」(『陶居物理学学校雑誌』第五〇〇号別冊、一九三三年)、三五二頁。なお、破線は筆者が付し、読点の位置は三上論文に従った。
- 8 「歴マ、」の付箋あり。
- 9 高橋昌彦「南部盛岡藩文芸人名録(稿)」(『福岡大学研究部論集 A 人文科学編』第一二巻六号、二〇一三年)。本稿は、半紙本四巻四冊「文藻諸芸人名録」(もりおか歴史文化館、近代書写)から、

近世盛岡藩関連の人物を中心に拾い上げ、素性、経歴を見やすく編集したものである。

- 10 『盛岡藩校作人館物語』(熊谷印刷出版部、一九八〇年)など、長岡高人による一連の著作を参照。

- 11 拙稿「志筑忠雄「三種諸格」の資料的研究」(『鳴滝紀要』第二八号、二〇一八年)、一三頁。

- 12 前掲『長崎洋学史』上巻、三四一頁。

- 13 前掲『長崎洋学史』上巻、三四八頁。

【付記】

脱稿後、日本学士院にて、大坂で蘭学塾を開いた中天游が校正した本に遡る九冊本「曆象新書」(目録番号七〇六四)に、本稿で主題としている序が付されていることを発見した。九大本と校合したところ、数力所に字の異同が見られたがいずれも文意を損なうものではなく、基本的には文意は一致し、「皇朝」に対し、平出も行われている。序の年記についても九大本と同じく、寛政一二年二月に下田三蔵(芳沢藤原武郷)が長崎で書写した旨が示されており、そこに迂齋の名は無く、本稿の論旨をさらに裏付ける結果となった。